

東北文教大学短期大学部民話研究センター資料叢書

おとぎり草

佐藤家の昔話（九）

編 武 田 正

東北文教大学短期大学部民話研究センター資料叢書

おとぎり草

佐藤家の昔話（九）

編 武 田 正

おとぎり草

佐藤家の昔話（九）

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
 うなぎ滝とガニ滝
 峠田の大蛇
 熊の泣き往生、鷹のつかみ往生
 鱒に雄なし、ヤマメに雌なし
 蛙の思い腹
 嘘語ろう
 ドンデンガラ
 一人静
 蛙草
 おとぎり草
 ねこあしの由来

19 17 17 16 15 13 11 10 8 7 5
 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12
 長渕の河童
 三上の延命地藏
 垢は湯の中で落とせ
 子産させ婆
 背の低い医者
 狸とむじな
 狐に化かされた話
 つばめ
 半足わらじ
 鳴りもの

32 30 29 28 26 25 24 23 22 20

桐栽培の研究 第一部原則編 佐藤孝一著

年中行事 — 上山市檜下部落における —

明治のころのはなし

1. 谷風の弟子 出羽崎
2. 乞食清吾

採訪ノート — あとがきに代えて —

34

59

76

84

凡 例

- 一、テープから翻字をしたものです。
- 二、〈表題の下の数値は一巻よりの通算番号です〉
年中行事は佐藤孝一氏のノートによります。
- 三、『桐栽培の研究』は許可を得て記したものです。
- 四、「明治のころのはなし」は別に入れました。
- 五、採訪ノートは今までのものも含めたものです。

1 ねこあしの由来

437

ある人が、ちょうど猫の足に似た草とつてきて、煎じて飲んでみたらば、非常に腹の具合がよくなった。んで、下痢したときでもええがなあと思つて、飲んでみれば、とっても具合ええもんだつたど。友だちさ、

「いや、ねこの足みたいな恰好しつた葉っぱの草…」

「ああ、あいつあへねこあし」て言うんだ。この辺ではへねこあし」ていうんだ」

「ああ、そのへねこあし」飲むと治る」

「あだなつまらね草で下痢治つか」

「いや、治る」

ところが、ほの人がやつぱり食い合せ悪くて下痢したとき、

「おう、君、下痢した」

「ほんでも、下痢してもへねこあし」で治んねものがある」

「はいつは何だ」

「赤腹だ。赤腹さあ赤痢のことだ。赤腹になつど治らねげんど、赤腹以外の下痢はみな治る」

ほして飲んだ。飲んでみたればやつぱり治つた。ほして、

「あいつあ何ていう草だけえ」

「へねこあし」ていうなだ」

「治つたぜえ、腹痛いな」

「はいつあ、ゲンノシヨークコだべな」（それがまさしくその証拠だ）

ほれから、（へねこあし）のことを（ゲンノシヨーク）でも言うのだけど。

どこの家でも土用の丑の日に採つて干しておく、その頃が一番充実した頃なんだけど。どんぴんからりん、すっからりん。

2 おとぎり草

438

むかし、仲のええ兄弟いだったげんでも、少しのことからいさかいになって、ほして兄もゆずらね、弟もゆずらね、最後には取っ組みあいの喧嘩になつてしまつたど。

昔は野原、山さ行くとき、たいがい山刀なたさげて行くもんだから、兄貴あ、舎弟に負けていらんねと思つて、カツとなつて、ほの山刀で切るつもりはないがったげんど叩いてしまつたら、弟の首切つてしまつた。ほして鮮血にまみれて、弟は倒つてしまつた。

「ありやりや、これは悪れわるごどした」

て、あたりほとり見てみれば、草があつた。その草いきなりとつて、揉んで、ノドさ、はいつ付けて結つて呉けだれば、血はとまつて、たちまちほの傷治つて、ほして息吹き返して蘇生した。

「こいつあ、草のせいだ。これは効く草だ」

ていうわけで、ほして怪我したときなの、ちえっちえっとなつて見たれば、大変よく傷口が治る。んで、弟は切つてつけた草だから、〈オトギリ草〉とすんべというわけで、今でも土用の丑の日に、はいつとって焼酎漬けにしてで、はいつ傷薬に使っているわけだど。

飲めば胃腸にもええなて、大変重宝がらつて焼酎さつけておく。どんぴんからりん、すっからりん。

3

蛙 びつき草 ぐさ

439

ある人が、田んぼさ田の草とりに行つた。そうしたれば、何だかガサガサて、パタラパタラという音すっど思つてだらば、大きい蛇が殿さま蛙の足片方のもんで、ほして腹も半分ぐらい呑んでいだっけはあ。そしてほの動くたんび、牙立てられるもんだから、ほの蛙が動がんねくて、ほのまんま、だんだえ、だんだえ、がおつ

て行く。これは可哀そうだと思つて、その田の草しつた人は、へ蛇さヤニが一番毒だて聞いたから、少々叩いだぐらいでは離さねもんだから、キセルからヤニとつて舐めらせだらば、いきなり吐き出した。ほして蛇は、どこともなく行つてしまつたげんども、ほの蛙は、足半分溶けたみたいになつてはあ、全然動かね。背中さ牙の跡いっぱいいいで、「いやあ、みにくいごどあ」というわけで、脇から葉っぱ、ちよえつと取つて、葉っぱ当てて、して、クコていう草ではいつ結つて呉だ。ほして間もなく引っくりがえつていた蛙が、くらつと起きた。ほしたれば、ぴよこらん、ぴよこらんで跳ねはじまつた。ほの草背負つたまんま。

「はて、おかしいこともあるもんだ」

て思つて、ほしてその人が蛙ばそおつと押えて、そのクゴ解いてみたれば、溶けかかった足あ、ちゃんと元通りになつて、背中傷もほとんど治つていだつけど。

「いやいや、ごだえ治る草は…」

て、ほれから、ほの草ばへびつきぐさて名付けた。へオオバコのことを、へ蛙

草」という。今でも手足切ったりすつど、蛙草あてて結うど、化膿しないし、痛みもとまるていうのだつたど。元々蛙さ結つて呉たのが始まりだて、この辺では語っているわけだ。どんぴんからりん、すつからりん。

4 一人 静

440

むかしむかし、きれいな娘いだつたて。ほしたらその娘さ二人の男が惚れた。一人はすばらしい旦那衆の息子、一人は貧乏人の息子だつたて。んだげんど、ほの貧乏人の息子の方は気は非常にやさしい。ほして男ぶりもええがった。旦那衆の息子はガマ蛙みたいで、めんくさいという、粗暴だし、まあ好きでないがたげんど、やつぱり、持つてるもの持つてるしなもんだから、その辺何とも仕様なくて、そしてその二人のみにくい争いが続く。はいつ、嫌やんだくなつてはあ、人里離れた山里さ行つて、一人ばかり暮していだ。

ところが流行病はやりやまいに倒つてはあ、死んでしまったはあ。ほしてほこさ一本の草が生えて、そして花咲いた。誰いうとなくこの花のことを、〈一人静〉で名前つけた。今でも人里離れた山にひっそりと〈一人静〉で、草花が咲いていんなだけど。どんぴんからりん、すっからりん。

5 ドンデングラ

441

ドンデングラで、この辺でいう草ある。あれも場所によつては〈痛み止め〉に使った。んだから〈いたどり〉で、〈痛みどり〉から言うようになった。

ところが、それは〈痛みどり〉でなくて、あるいは、木みたいになつてくから、板取りで、板とれつから言うたんだべという人もある。

いろいろ、そういう話あった。

ところが、唐の国では、

「あいつは虎杖だていう。虎のツレンポだ」て言うた。今でもドンデンガラのことを〈虎杖〉て書くんだげんど、ほの、丁度、品種によつては虎のような、テンテンの模様のついたドンデンガラがある。はいつば見て、〈虎がツレンポにでも使ったんでないんだかなあ〉ていうので、虎杖と書いて「イタドリ」て読ませたんだど。〈痛みどり〉ともいうし、〈板取り〉とも言うし、この辺では通称ドンデンガラて言うげんども、何か不気味な斑点あったり何かえすつから、はいつ見て、ぞつとして、どんでんがえりして戻ってきた。んだから〈ドンデンガラ〉ていうなだ、て、昔はほういう風に言うたもんだけど。どんぴんからりん、すつからりん。

6 嘘語ろう

442

干蒲ひかば（宮城県白石街道にある）は、ここより山沢なもんだから、こつちより田植えが遅いんで、こつちから田植に行つたど。ところが干蒲あたりさも、檜下の、

「語ろう」の名前聞えで、

「檜下にざあ、嘘語るていうないだった、んねがえ」

「いだ」

「どこらの家だ」

「いや、おらえの家だ」

「いやいや、いや。ほいつあ君、われご言うたねえ」

「いや、悪れぐない、ほれは、嘘語ろうていうのは大したもんだ。誰でも『嘘語ろう』なて名のられるもんでない。殿さまからもらった名前だから、ねつくらくなね（一切かまわぬ）」

「嘘ざあ、なぜして語るもんだ」

「いやいや、嘘だって、ええくらい語られるもんでない、嘘一卷から嘘十巻まで、巻物あつて、その巻物通り喋らねど、嘘ざあ、通り悪くてわかんねもんだ」

「はいつ、何とか、檜下さん、見せてもらわんねべか」

「いやいや、袖すり合うも他生の縁ていうこと言うたもんだ。君ださだら見せてもええがんべ」

「ほんでは、借りに行ってええがんべが」

「ええ、家に親父いたから」

「ああ、ほうがつす、んでは」

ていうわけで、田植もそこそこして干蒲から二、三人、檜下さ走ってきた。まず一里の道走ってきて、ほして、

「嘘語ろうの家はどこだい」

て聞いたつて。ほうしたれば、じさまに、

「何、この野郎べら、とんでもないことぬかす」
て、さんざん怒らつて、ほして、

「ほだな本なの、あるもんでない、誰言うてよこした」

て、ほうほうの体で逃げて返って行った。

「いやいや、ひどい目に会って来たい、君、嘘の本なの無いで、親父にかんかん
ごしやがつできた」

「いやいや、はいっあ、嘘の第一巻だ」

て言うたけ。どんぴんからりん、すっからりん。

7 蛙の思い腹

443

蛙だけは、思っただけで腹大きくなんなだど。んだから、何もなくても腹大きくなるのば、「蛙の思い腹」ていうもんだど。蛙は産卵してから精液かける。

「誰の腹大きくなったなが、思い腹でないか」

なて、男がいなくて腹大きくなったのをいう。

「どっからか、魔さしたんでないか」
なて言うど、

「魔まばりでもない、羅らもさした」
なて、よく話あつたもんだ。

8 鱒ますに雄なし、ヤマメに雌なし

444

七ヶ宿あたりでは、〈鱒おすに雄なし、ヤマメに雌なし〉て言うてゐるど。またヤマメというな、鱒の雄だなて言うてもいる。ヤマメが山で川さいて、匂いを流すんで、鱒がみな海から昇ってくるんだど。七ヶ宿あたりではそう信じているもんだ。

9 熊の泣き往生、鷹のつかみ往生

445

熊や鷹なんか多くいる七ヶ宿では、熊狩りに行って、へ往生声出さねうちは傍に寄るな」というたもんだ。へ必ず手負いの熊ばかりやられつから、往生声出して、初めて死んだのがはつきりするんだ。泣き往生というて、大声立てつど熊はきまりだ。それから熊鷹は、つかみ往生というて、必ず往生際につかむ、何かさつかまる。つかまつた時には往生すつ時だ」というもんだど。

10 峠田の大蛇

446

七ヶ宿の峠田のダキていうすばらしい山で、そこはゴロ山で大きな石がいつぱいあって、石と石の間から風穴みたいになっていで、冬は温かい空気、夏は涼しい空気が、風がほっから流つてくる。

そこに、誰言うもなく、すばらしい大きい蛇が住んでいた。ほの蛇はまず、働きに行った人に悪れごどする。掛ったり、追つたり、あるいは昼食なの一呑みに呑んだりしてしまう。

んで、困っていただれば、あるキコリが山さ行ったらば、いきなり襲わった。逃げ場もなくて、ほしてマサカリで戦った。何とも疲つてきて、蛇の方がつよくなってきた。人の方は受け太刀になってきたはあ。ほして、ところどころから炎のような舌で、ペロペロていうど、息吹きかけられる。体がだんだえだるくなってくる。こんではうまくないていうので、その人がこんどは、蛇の上の方さ登って行つて、山の上から石転がした。ごろごろ、ごろごろ、大きい石転がして、ほの石が当って蛇が、がおったど。そしてほっちこっち石さぶつつかつて、蛇が苦しみ始めたどこ、最後のとどめ刺した。ほして、ほこらこら探して、一族郎党全部殺してしまつたはあ。

て、その蛇は長さ十間余、胴のまわりは三尺ていうから、さしわたし一尺ぐらいたつたど。立てば二間にもなつたど。

そしたら、その家さだんだん病人などばり出て、不幸つづきで、ほして家族の人は死に絶えて行くもんだから、占師さ行つたらば、へ七代崇るていう蛇の亡霊が出た。

「おれは悪れごどしたから、おれ殺されんな仕方ないげんども、孫子まで殺さんなねざあというわけだ。んだからおれは祟るんだ」

て、峠田では今ではその家の人は絶えていねぐなつてしまつたど。

11 うなぎ滝とガニ滝

447

蔵王山の山中に、上の方がうなぎ滝、下の方がガニ滝という二つの滝あるど。うなぎとガニは両方とも洩の主だつたど。どっちもゆずらね。

「おれがここら周辺のオサだ」

「おれが主だ」

ていうて、ゆずらねがったど。

ある時、うなぎとガニが覇権争いするんだど。ほしてうなぎはガニば齒でかじつて殺してけるつもり、ガニはハサミでうなぎばやつけるつもりで、えんえん七日にわたつて争いが続いて、ほしてほいつが終つてみたればほのうなぎがガニにちよん切らつではあ、死んでしまつて、ガニが生き残つて、今でもそこばガニ滝ていうてゐるてよ。どんぴんからりん、すつからりん。

12 鳴りもの

448

ある人が江戸さ行つてきた人に、「鳴りもの」借りた。

「君、この鳴りものは、決して強くひくなよ、強くひくとええ音出っけんども、危険なことあつから決して強くひかねでける、貸すから」

て、その鳴りもの借つて、ほして見たれば、なんとてこの妙なる音で、すばら

しい音で、ひけばひくほど段々ええ音が出てくる。強くひけば強くひくほどええ音が出て、強くひくなつて言っだんだげんども、だんだえ、だんだえ強くひいで行ってしまった。

ほうしたけあ、最後にガチャンと言うたと思つたけあ、ものすごい大きい蛇が出てきて、体ぐるぐる八巻き半に巻がつた。ほしてほこさ友だちは、「鳴りもの」とりに来たつて。ほうすつど、

「ほりや、強くひくなつていうに、ひつから、ほういう風になつた。んだから人の言うこと聞かんなねもんだ」

て、言っだつたて。どんぴんからりん、すつからりん。

13 半足わらじ

449

ある店でわらじ売ってで、必ず半足つけて売った人いだけだ。はいつがな
ぜだかて言うど、わらじていうな、必ず一緒に切れるもんでない、どっちから
切れっからって、一足だど、どっち切っても投げんなねわけだ。んだから、半つ
けっど、その半で残った分、大分履ける。とことんまでわらじ履けるというわけ
で、その人は殿さまから、お褒めの言葉あつたって。

この辺で、わらじ作つどきは、「ハンクタ（半分）で止めんな、必ず一足にして
やめろ」て言うし、

「ハンクタは峠のかげまで行つて投げてこい」

なて言うたもんだげんども、半ばものざあ、作らんねがつた。
ところが、売るに半足つけて売って大変ほめらつた話あつた。

棺台さ、先にツバメつけたもんだ。ほのツバメというな、忌中のとき、なぜしてつけたかて言うど…。

お釈迦さまがネハンに入るときに、いろいろ親しくした動物たちがみなかけ寄ったげども、ツバメがあんまり化粧長くってはあ、間に合わねがったど。ほんで、まず、

「こりや、すまないことをした」

「ほんでは、せめても、道案内でもすんべ」

というわけで、ツバメが道案内つとめだ。はいつで、今でも棺台さ、いわゆる浄土さ行くには、必ずツバメが道案内をするというわけで、ツバメ作ったもんだて、よく昔の人あいたもんだったなあ。

15 狐に化かされた話

451

人力ひいてた人、夜中にお客さま来て、人力ひっぱって、見えねぐなつたもんだから、家内中、親類縁者と、ほれからいろいろな人頼んで探しに行つたれば、松原にいだつけど。ほして、人力どこだずも、何か持^たつてなれ、ほうして松の木さ当つど、「はい、ごめんなさい」て、人さぶつつがったどこだずも、はいつあ。「ごめんなさい。ごめんしてけらつしやい」

で、走つてあるくわけだずも。ねじり鉢巻きで汗出して走つてあるくわけだずも。右さ行つたり、左さ行つたりしてよ。探しに行つた人だち、ほれ、

「誰それ、なんだ、まず」

ていうたら、やつと気付いて、

「はあ、ほだら狐に化かにさつだんだべ」

て、初めて解つたてだなあ。

16 狸とむじな

452

狸ていうな、海辺に住んでいんな〈狸〉ていうたもんだ。山にいんなは、みな〈むじな〉だ。

んだから、〈むじな〉ざあ、みな腹ふぐつで、腹づつみざあ打たねんだ。〈狸〉ざあ、海辺にいて、海の雑魚、腹ふだに（いっぱいに）食ってつから、滋養ええぐなつて、ああいふ風に腹さ脂たまつて、腹ぽんぽんになつて、腹づつみ打つんだ。ここらの〈むじな〉は滋養がええぐなるほどには餌食わんねから、だめだ。みな〈むじな〉ばりで、〈狸〉ざあ山にいねんだと。

んだから、ここらでは「狸寝入り」て言わねで、「むじなつかして」と、よく言つたもんだ。

商いする人は「狸」は「他を抜く」ということで珍重したが、百姓は「田をぬく」というので嫌つたもんだと。

17 背の低い医者

453

檣下の医者で、長清水（上山市）の出で、石井先生という人이었다。ほの先生は知恵でこりかたまったみたいな人で、小っちゃい先生だった。

せんに、どこの家でも馬飼っておくもんだから、馬暴ばつで何とも仕様ない。梯子持^{たが}ったり、脚立持^{たが}ったり、竿持^{たが}たりして行つたげんども、何ともおさえらんねくて、村中、ししやますしつたて（手に余つたそうな）。

ほしたれば、ほの、垣根のかげから竿さ吊した人參ぶらさげて、ひよいつと突出した人이었다つけど。馬は人參好きなものあるもんだから、ほこさピターツと止つて、人參食いはじめたど。ほしたれば、

「誰か来て、押さえてけらつしやい。誰か来て、押さえてけらつしやい」

何だ、人いたような、いねようなと思つて、ほだえ小^ちつちやくくて、あばれ馬とりおさえらせだ子ども이었다つて、はいつがそこの医者だったて。んだから小っちゃこいときから頭すぐれていだんだつたべねえ。

この医者の「阿呆目薬」はええ、火傷やけどの膏薬は跡残らねていうので、遠くから来ったものなあ。

孫めんごくで、博覧会さなの、背負せつて連て行いったことあつた。

「吉之助、何見てきた。面白いがったが」
て言うたら、

「さっぱり面白くなかつたつす」

「なして、何見てきた」

て言うたら、

「じんつあの背中ばり見てきた」
て言うた人だつたど。

18 子産^なさせ婆

454

子産させのおませ婆が、旅人が難産^やしたから来てけろて言^やつて、行^やったんだど。ほして行^やつて産^やさせて歸^やつてきたげんども、とにかく旅人^やざあ、ろくなもの食^やねがら滋養^や不足^やして難産^やしたもんだと思^やつて、何か家で炊^やいて、オカユでも食^やせんかねべと思^やつて、お札も早^や々^やにもらつて歸^やつてきた。ほうしたら途中^やまで送^やつてきたんだどなあ。

「こつから、おれ、犬^やきらいだから、犬^や恐^やかないから行^やがねはあ」

て言^やうて、戻^やつて行^やつた。歸^やつてきてみたれば、お札^やの金^やだと思^やつたな、ほとんど木の葉^やや何かで、体中^や、まず狐^やの穴^やの中^やさ入^やつて行^やつたので、汚^やつていだつたつて。ほして、みんなに、

「なんだ、狐^やに化^やかえさつたつたべなあ、ほんでは」

て言^やわつたれば、落胆^やすつかと思^やつたれば、そのおませ婆^やていうな、大変^や気分^やええぐして、

「いや、おれは人ばりでなく、狐まで認めだ産婆だから」
ていうて、大変気持ええぐしたていうんだな。そいつも明治に入ってからのはなしだ。

19 垢は湯の中で落とせ

455

ある家で、「お湯さ入りござっしやい、お湯さ入りござっしやい」て言わつて、その人も、ありがたいもんだから、貰い風呂させてもらつて、家の人みんな入つてから、

「ええがつす、決して外で洗わねでけらっしやい、中で洗つてけらっしやい」
て言うわけだど。

「不思議なもんだ。大概な家では、中で洗わねでけらっしやい、湯汚れっから」
て言うのに、その家では上がらねで洗つてけらっしやいて言うから、中で一生

けんめい洗って、ほして上がって、へありがどさまで言うのと、どっとドウ抜いて、ほいつは畑の中さ流って行って、桑など肥料買わねで、ほぎつつたど。（葉が出たものだ）

20 三上の延命地藏

456

もと「夜泣き石」て言うたもんだ。

三上部落衆だ、「ええ石だから、お寺さまさ納めんべ」ていうわけで、引張り行つたんだ。引張り行つたれば、何^{なえ}つたて引張らんねし、綱つけたまんま帰って来つど、次の日、ほの綱はボロボロになつていつかつたど。

「おかしい、おかしい」

と思つて、ほだごどまた考えて次の日行つて、つう（少し）と引張つて綱つけたまますつど、またボロボロになつていつかつたて。して占師さ行つてきいて

みたれば、

「その石、引張って行くと、ろくだなことないんだ。んだからその石は元の所^{どこ}に居っだい石だから、元のどこさ返せ」

て、占師は言うた。ほんでもかまわず三上の衆は引張ってきたていうんだな。

引張ってきて、寺の前さ置いだれば、夜泣きするんだど。絹地裂くような悲痛な声出してな。ほしてこんどは何とも仕様ないていうわけで、江戸さ行つて、江戸のえらい神主の方に、「延命地藏尊」ていうな書いてもらつて、そいつを貼つて彫つてもらつてから、夜泣きしねぐなつたど。んだから「夜泣き地藏」ていうてるんだけど。

21 長渕の河童

457

河童の頭の皿のどこを竹でポンと叩くと、いちころにまいるんだというたものだ。木の棒や金の棒で叩くよりは、河童は竹の棒で叩くとええなだて、年寄りはやうてだもんだ。

「河童に追っかけられつどなんねから、竹の棒ついで行つた」

なていう話、よく聞いたもんだ。時たま胡瓜畑さ上がつて胡瓜を食つてだど。して、胡瓜は非常に好きなんで、スシ屋などで胡瓜のこと「カップ」ていうてる。ほっから来てるんだなんていう。

榎下の下のどこに「長渕」というところある。河童がでてくつから、一人で行くなどか、淀みに河童がいて、夜な夜な出てきて、胡瓜畑にいだっけどか、馬洗い場も長渕にあつたそうだ。

その上に、車堰というところあつて、昔は水車があつたとこだった。鉾山ができ、長渕が汚れてからは、車堰の方で水浴びするようになった。車堰の下の方に

大堰といふな、栖下と皆沢、藤沢、経塚、姥懷あたりで灌漑用水に使ったところで、水浴びしたりした。

桐栽培の研究

(第一部)

原則編

著者 佐藤孝一

目次

- 一、科学する農民
- 一、林業の好きな農民
- 一、風袋のない施業
- 一、桐仕立の七原則
- 1. 不生不滅の法則
- 2. 向化性の法則
- 3. 化学反応速度の法則
- 4. 根幹比の法則
- 5. 贅沢吸収の法則
- 6. 氏より育ちの法則
- 7. 整枝の法則
- 一、桐樹販売の七原則
- 1. 玉の測定
- 2. 樹齡測定
- 3. 完全円形整形
- 4. 適材適所
- 5. 好期(チャンス)
- 6. 法正林業
- 7. 残存木
- 質問に答えて 二十二章
- 1. 桐の将来性に就いて
- 2. 桐にも品種があるか

3. 桐には適地不適地があるか
4. 理想的な土地及び場所
5. 植付の時期及び植付時の注意
6. 苗木の選定に就いて
7. 植付の距離
8. 元肥の要領
9. 一等地にも肥料は必要か
10. 桐に肥料を施しても採算が合うか
11. 桐には耕起が必要か
12. 空気滲透はなぜ必要か
13. 芽かきの必要性に就いて
14. 枝下何尺が理想か、最低どの位必要か
15. 主な害虫と駆除法
16. 主な病気とは
17. 台伐りの是非に就いて
18. 桐の最大成長量及び寿命
19. 開花が何故悪いか
20. 開花を不完全ならしむるには
21. 二代目（伐りあと）の仕立法
22. 桐樹組合如何

一、科学する農民

今迄の農民の歩んで来た道は体験だけをたよりに進んで来たが、桐栽培も同様でした。何事も同じであるが、物に例えれば富士山に登る様なものである。「吉田口」「大宮口」「御殿場口」其他色々の道であるが、どの道を登っても頂上を極める事が出来ますが、それには廻道と近道とがあるのであります。イワユル科学の道と体験の道があるのであります。

体験の道だけを歩んで居たら四十年もかかる処を科学の道は一年位で平気で登れます。一例をあげれば（三寸木）四十本と（尺木）一本がイコールであります。科学の力は十年で五玉位はらくらくと出来るが十年で三寸木（1／8玉）位なのが多く見受けられます。

田や畑と違って林業特に桐栽培は行き詰まったものではありません。体験だけのテング病にかからぬ様に！！

一、林業の好きな農民

科学の次に考えなければならぬ事は何かと申しますと、林業の好きな人を作ることです。頭もあり、金もある人は勉強して役人になったり、会社員になったりして居る。勉強せぬ人でも町に出て事業をしたり、商売をして居る。百姓は何故嫌いか？つらい割合に儲からないからである。昔から諺に「好きこそ物の上手なれ」と云うのがあります。しかし考えて見ますと金の儲からなくとも好きなものがあるはずで。

碁や麻雀で二晩夜ふかしをした!!等と云う事をよくききます。それを面白くやるためにはその規則を覚えなければなりません。何も知らぬ者は一回でいやになつてしまいます。桐仕立も色々とその道を覚えて来ると一日二日はらくに夜ふかしも出来ます。科学と云う者と組んで研究し、又次に色々七原則なるものを御覧下さい。そうしますと面白くなり、好きになる事うけあいです。

一、風袋のない施業

稲作りも「しいな」さえ出来ない様になると、反当六石はどなたにも穫れるんだそうですが、世の中はすべて風袋が多い。株の配当、銀行の利子、皆儲けたかすである。一人やり方によつては、桐栽培だけは風袋を少しも出さずに実行出来ます。

一、桐仕立の七原則

昔から分らない事を七で割り切つて居ります。「恋には七つの鍵がある」「七不思議」広い海を「七つの海」「七福神」永久に続く月日を日月火水木金土等と桐仕立も七原則で記して見たいと思ひます。

1. 不生不滅の法則

お釈迦様は三千年前にこの事を発見致しました。この法則は世の中にある物はこれを造り出す事も無くする事も出来ないと言う事で、我々の出来る事は形を変える事だけであると云う事です。

故に何も無い所より桐が生長する事はない、元は何かと云えば、炭素、水素、窒素、磷酸、加里、苦土、鉄、硫酸、石灰、酸素で之を植物の十元素と云います。其他マンガン、亜鉛、硼素、銅、モリブデン之を植物の微量元素と申します。之が稲に働けば米に変わり、リンゴの木に働けばリンゴに変わり、桐に働けば桐の木が肥大伸長するのであります。故に之が最高度に働けば桐も最高度に成長致します。

2. 向化性の法則

植物の根は肥料分のある方向に伸びる性質を有して居ります。之を向化性の法則と云います。故にとりの家に立派な竹林がある。家でも竹藪がほしいと云う

時は自分の家の畑を充分に柔らかに耕し、沢山の肥料を入れてやれば、となりのオヤジに頭をさげなくてもすむ計算になります。ですから施肥の部位を考える事です。

3. 化学反応速度の法則

植物が養分を吸収するのは、別に精神があつて働くものではありません。あれは純化学反応です。浸透作用イオン交換作用とか云う化学反応です。この化学反応の速度は温度と濃度によってきまつて来ます。故に寒い間はいくら肥料を入れても桐の木はチツトも伸びません。「10℃」上昇する事により三〜四倍位吸収がよくなります。

4. 根幹比の法則

窒素をやれば頭が大きくなり、磷酸をやれば深根性になり、加里をやれば根の広がりがよくなります。故に三要素の%に就いて考えて見る必要があります。

5. 贅沢吸収の法則

栄養分が沢山ある処では生理的必要以上に之を吸い込む性質を贅沢吸収と云う。土地、空気、光線、肥料、水分を充分贅沢吸収させる事であります。人間は贅沢をさせるとロクな者になりませんが、桐栽培こそ贅沢吸収は必須の要件です。

6. 氏より育ちの法則

昔の兵隊検査のある時代、毎年全国一の体位は何と云っても岩手県でした。処が八く九年に一度全国でビリになった事があつたそうです。その原因がどうしてもわからなかったが、色々と研究の結果冷害の不作であつた。不作の年に胎内にあつた子供が二十年先に影響したのであります。又文理科大学で発表致した事によりますと、人間の頭脳の発達は五才迄である。故に五才迄の栄養の良し悪しによつて程度がきまるのだそうですから、少しびんぼうしても子供、特に五才迄はうまい物をうんと食べさせる事だそうです。桐も第一年目に三角形の底辺を作るつもりで、大きな三角形を作るには底辺を大きくする事であり、又通直な幹を作

る事により養分の通りをよくし市場価を高めます。

7. 整枝の法則

特に枝打ちとか芽かきとに分かちます。枝打ちは止むを得ず行うので、時期は旬日毎にやってみましたが、夏土用三日前花芽切りは夏土用後花芽形成後行います。又肥料の配合法によりある程度結実を防げます。めかきは一本当たり五〜七回行います。充分に頂芽に力をもたせる様にし、あまりせつかちに行わぬ事が肝要です。

一、桐樹販売の七原則

1. 玉の測定

木材はすべて石、若しくは立方米等で測られて居りますが、一人桐だけは「玉」を以て測られて居ります。しからば一玉とは!! 末口径六寸、長さ六尺五寸を以て

一玉と致しすべて三分から五分のマルミを以て取引されて居ります。三分五分とは穴を意味するものと聞いて居ります。五寸木以下は五寸木は二本で一玉、四寸木は四本で一玉、三寸木は八本で一玉となり、二寸五分はメンボーとして一尺単位で取引されます。七寸は二玉、八寸は三玉以上一寸上る毎に一玉上ります。

2. 樹齡測定

桐は樹齡、年輪の数によつて同じ玉数でも二倍も三倍もしますので、今から植え付ける分には必要ではないかと思ひますが、一尺一尺五寸位になつて何年であるか見当がつかないと云う事があると思ひます。年輪は一本何千円と違つて来ますので!!すべて地球上の生物一年三百六十五日の日数がたちますと、どこかに証拠が残るものです。たとえば松や杉の木は「お前何才か」と聞いても返事しません、木を切つてみれば年輪ですぐわかります。「ウチの馬は大分古くなつたから取り替えておこう」と云うわけで馬喰を呼んで来て、「ウチの馬は七才だから値

よく買つてくれ」と云つても「嘘云うな十五才過ぎて居るではないか」とちゃんとわかつてしまうのです。これは歯を見てわかるのです。桐は枝でわかります。一口に云えば一曲一年です。一年これが幹になり、二年目はそれより三本〜五本位枝が出来、三年目はその枝より出来た枝を数えていきますと大体見当がつかます。その他、枯枝、こけの出来具合等で判断致します。

3. 完全円形整形

桐の木を伐つて見ると「マンマル」と云う木は一割もありません。甚だしいのになると六寸〜八寸と長短三寸も違うのもあります。すべて最小径取引をして居りますので、たとえば玉価二千円致しますと二千円対六千円となる訳です。円形に整形する事により二千円を六千円にする事が出来るのであります。方法として私、枝切りのとき梯子を掛けて切りましたとき、若干傷がつきましてそれが異様にふくれた事にヒントを得まして、外皮に鋭利な刃物で数条のきずを入れる事により木質部に何の故障もなく両方一寸位ふくれ上がって来ます。円形整形意のま

まとなります。目下稀硫酸の噴霧により刺戟する事を研究して居ります。

4. 適材適所

何でも同じ事であるが、特にハイクラスの桐はしかりであります。何と云つても、物（杙）並物と大別される訳ですが、自分で伐つて売る場合桐紙用、杙板用、貼経木用、琴材、ガラス磨用のグライダー又は造作材、高級掛物箱用外高級杙下駄及び並下駄、高級家具その他を用いたと用いないとでは相当の巾が出来て来る事必定です。特に支沢きを出来る様に各々の研究が望ましいのであります。

5. 好期（チャンス）

大体一番の大口に取引されるのは秋であります。大都会の年末年始に間に合う様に業者は働いて居るので、特種でない限りは今迄の統計では秋であります。下駄、タンスはやり秋から春が一番多く取引され、したがって値段もよい様であります。

6. 法正林業

先ず一町歩を目標と致し、反四十本を植付けし十年で平均元木八寸木、二丁目七寸木、計五玉とし、二千元の場合一本一万円、一反四十万円を生産目標と致し、毎年一反歩ずつ伐ると、元の一反歩に廻つて又四十万円を売り上げる事が出来ま
す。言いかえれば四十万円の年収を上げる事が出来るのであります。

7. 残存木

一反歩中三本位残しておく事であります。神町の桐の木一本四十二年生木で最終価格八十五万円と聞いて居ります。会津にも八十万円位なのが散見されます。
四分の一としても今度伐る時迄六十万円と云う事になります。

質問に答えて 二十二章

1. 桐の将来性に就いて

最近桐の需要も年と共にふえ、現在すでに戦前の三倍に達し、十年後には更に二倍になると推定されて居ります。特に山形独特の桐紙は最近相当にドルを稼いで居ります。将来の見通しは決して心配ありません。

2. 桐にも品種があるか

あります。大別して「支那のラクダ桐」台湾の「九重桐」内地の所謂地桐の三種ですが、小さく分類すれば内地物だけでも相当多く、樹皮の色による分類、葉による分類、材質による法等があります。

3. 桐には適地不適地があるか

勿論あります。表土深く肥沃土で新鮮な水分がたえず供給される埴壤土で又弱

酸性に適し、向は東南面で荒風の当らぬ処、特に朝もやの停滯する所を大体適地と見てよいでしょう。表土の浅い乾燥地重粘土で停滯水のある過湿地又は強烈な西日、風道等は不適です。

4. 理想的な土地及び場所

前項の外出来得れば平地が色々の面で良く、又一団地で道路に近く家に近い事が便利です。

5. 植付の時期及び植付時の注意

大別して秋と春ですが、私の場合秋植の方が偶然よく、春植は少し劣って居ります。冬期間に根の準備が出来て居るからと推定されます。桐の植付は特に一般の樹木と違う事は根元を余り固くふみつけぬ事が肝要であります。鋤等で軽いたく程度にする事であります。

6. 苗木の選定に就いて

苗木の良し悪しは根部の發達の如何であります。桐材を売る時は幹ですが、苗木は根本が一番です。根部の良いのは必ず葉の数が多く芽の数も多い訳です。それから無病の事です。ズバ抜けて良いのは精英樹と同じでどこまでも成績がよくある人の場合は八十円の処二百円でも良い苗木の方が将来得だと云つて居ります。

7. 植付の距離

先ず自らの生産目標によるものと思います。

「短伐期」にするか「長伐期」にするか、ベ物（高級品）にするかによつてきまつて来ると思います。私の場合各々の目的により四坪一本、九坪一本、十六坪一本等を試植して居ります。

8. 元肥の要領

先ず堆肥五貫目位を三尺四方、二尺深さの植穴に入れて土をもどし二百匁の木

灰を入れて又土をもどし、そこに苗木を植えて植付肥として配合（三要素）を百匁位施して覆土致します。

9. 一等地にも肥料は必要か

今迄最大成長量を研究調査した人は少なく、そのデータがありませんので、どの位成長させたらよいかと云う事は未知数でありました。処で一等地の成育が最大であると誤認されて居りました。成長の早いものほど肥培の必要性がますます加わって来るのが普通です。肥培すれば落葉還元等により地力の維持も出来しかも経済的に著しく有利であります。

10. 桐に肥料を施しても採算が合うか

今迄の色々結果からみて、自然仕立と肥培をしたのとの差をみますとき、当然相当の差があり肥料代と桐の売り上げ代との差はその比ではありません。肥培管理によって撫育年数を短縮し、回収を早めますので!!

11・ 桐には耕起が必要か

桐にも他の作物と同様必要であります。空気滲透をよくし肥料の分解をよくし、根の伸びを助けます。又行つて見ますと、深根性なるが故に根を余り損じませんし、深部に空氣が入りこみますので山地でも出来得る限り行ふ事がよい様です。

12・ 空氣滲透はなぜ必要か

かの桜島大根は、なぜあの様に肥大成長するか、六貫匁位になるあの大きな大根の種子を鹿児島に蒔いても、もうチットもオガリません。なぜであるかと九大の川村教授が研究をしましたが、桜島の土壤は軽石がこわれて出来た土だから、土の中に空氣が非常に多く入っているので根が思いきり息をし、思いきり太るのですが、鹿児島のは火山灰で土の中に空氣が少ないので思いきり太れないと云う事です。桐も地下の培いと営みは桜島大根と同じであります。

13・芽かきの必要性に就いて

桐の一番ねうちのある処は幹であり、しかもふしのない通直な幹であります。ふしが何故出来るかと云えば芽より生じた枝であるから大体自分の目標を立て、例えば一丁高（六尺五寸）二丁高（十三尺）三丁高（二十尺）その下の芽を全部かき取る事によつて通直な無節を作る事が出来るのであります。

14・枝下何尺が理想か、最低どの位必要か

長く元末の差がない程良い事になりますが、私の場合枝下三丁位とし又場所地形により差がありますがそれ以上は伸び次第にまかせて居ります。最低六尺五寸であります。

15・主な害虫と駆除法

「食葉性害虫」「穿材性害虫」「吸液性害虫」「食皮性獣」その他であります。食葉性害虫の種類は極めて多く、其の数は五百種位に及んで居ります。

もつとも代表的なものは多種類の蛾、ハバチの幼虫、ハムシの成幼虫等で砒酸石灰水及びBHC等で防除出来ます。「穿材性害虫」当方ではヤナギシリ、シロゾーは少なく大体はウスバカミキリとキマダラコーモリの二種であります。防除としてはBHCを水で固めに練り食穴につめ、粘土で又上からおさえます。「吸液性害虫」アブラ虫、ダニ類がつきます。アブラ虫は葉につきますがBHCで防げます。ダニ類は幹につきますが硫黄合剤三十倍液にBHCを加用すれば完璧です。食皮性の獣とは野ねずみ、野うさぎであります。私の処は余り被害はありませんが天童方面には少し見られます。昔からカヤで囲む方法、コールドールを塗る方法が用いられて居ります。その他キツツキ、蟻でいずれも放っておけば命とりになりますので注意が必要です。之が防除法は面接の折申し上げます。

16・主な病気とは

たんそ病、ふらん病、てんぐす病であります。

○たんそ病 五六月頃から発病し、葉茎枝等緑色の所に発生し大なる被害を及ぼ

します。褐色の斑点が出来、葉では斑点のまわりが黄色くなり、茎ではやや長目のカサブタ状になり、このため枯死する事があります。褐色斑点の上に淡桃色の粉のような物が見られますが、これがたんそ病であります。ウスプルン加用五斗式ボルドー液がよくダイセン水和剤も効力があります。

○ふらん病 東北地方に広く発生し甚大な被害を与えて居ります。幼老の別なく専ら褐色の樹皮下をおかし、昔から「ヤケワレ」等と言われて居り、又は凍害によるものと思われて居りました。始め被害部が少し凹み、縦しわを生じてさめ肌状になり、皮はたやすくはげ又巻き込みが形成されます。予防法はこの菌は樹体の傷口からだけしか侵入出来ませんので芽かきもあまりおそくなり傷が出ない様にする事、それから被害部を削り、コールタールを塗る法。芽の出る前三斗式ボルドー液を用いても効果があります。てんぐす病は当地方にありませんので省略致します。

17・台伐りの是非に就いて

特に一等地は台伐りした方が将来の勝利の様です。又苗木が悪くぜひしなければならぬものもあります。土地に依り止むを得ずやせ地等に植えた場合台伐りに依り地金がへル事もありますので、自分の生産目標に合わせて行いう事です。

18・桐の最大生長量及び寿命

本当の最大生長量は残念乍らわかりませんが、神町の大桐の場合四十二年で百五十玉と推定されます。寿命は学問では五十年と云われて居りますが、私が目撃したのでは四十五年です。私の家に保存してあります。

19・開花が何故悪いのか

結実した枝の八割は枯死します。枝枯すると根が後退し、又ふらん病の侵入口となります。昔から枯枝が半分以上になったら売バとされて居ります故に大木にするには過早の開花は禁物であります。

20・開花を不完全ならしむるには

樹木の結実は「養分説」「酵素説」「刺戟説」「開花ホルモン説」等がありますが桐の場合土地の良い処と悪い処の差の甚しい所にヒントを得まして肥料養分説を採用致しました。外の作物、果実、種子、塊根、葉等と違つて收穫の対象は幹でありますから実のならぬ肥料の配合と施肥の時期で開花を不完全にする事が出来るのであります。

21・二代目（伐りあと）の仕立法

成るべく地際から伐る事は勿論ですが地上部全部を剥皮し上根より萌芽させる事に依つて古株を抱くことなく植付の一代木の様な成績を見られ、長持ち致します。

22・桐樹組合如何

世に会津桐南部桐の名声がありますが残念ながら山形の桐は相当優秀なのが

あつても会津桐及び南部桐に仕訳きされ市場に出されて居ります。各々のメーカーに手伝つて居るのであります。之が対策と致しましてガッチリした組合を組織して生産技術の向上と量産とに依つていやが上にも山形桐の名声を揚げなければならぬと思います。

第一部完

第二部 実習編（研究中）

一、期節に応じた手入れ、施肥、防虫、病害予防法に就いて

一、一年で二ツ年を取らせる法

一、農閑期を利用して半製品にする法

1. 桐枝編

2. 下駄編

3. 製品の乾燥法

昭和三十三年一月十日 印刷

昭和三十三年一月十五日 発行

著者 山形県上山市大字榑下八五

佐藤 孝 一

発行人 本庄森林組合

表紙桐紙提供者

古沢桐紙店

B 6 版 表紙 桐紙 本文 20 頁 「発刊に寄せて」 上山市長 酒井久三郎、「発

刊に寄せて」 県森連 日野佐吉、目次 8 頁、扉

（著者の許可を得て、資料として収録したものである）

年中行事

— 上山市栖下部落における —

佐藤 孝一 氏 述

一月元日

○元日詣り。除夜の鐘を聞くと年寄は近くの観音さまや神明さま、山の神、地藏さまの神仏へ、若衆は遠いところまで、三吉山、お葉山虚空蔵山から八幡さまあたりまでめぐりお詣りをした。

○元日の買物。部落の店々はきそつて、オマケの景品をつけてくれた。特に清酒又は四十匁のタバコ等を多く買えば双六、カルタ、家族合せ等よりどりもらえた。子ども等はそれがうれしかった。

○正月の餅搗き。主人と長男でコネリ半分搗き半分といった具合で、あとは夫婦でアイジャイをして搗き上がった餅は、のし板に米の粉をしいてその上に置き、まず神さまに供えるお供え餅は丸める。神棚、かまど、便所、台所の神々の外、

お仏さまにそれぞれ供えて正月を迎える。

一月三日

○正月休み。常に働き続け儉約してきた農民も、三が日中は全く極楽、「油のよ
うな酒のんで、木っ葉のような魚食って」、あとはのんびり。家によつては三ヶ月
うちにハンバキを作ったもんだ。普通は「みごハンバキ」、炭焼きは保温のため「ワ
ラハンバキ」を使用した。

一月四日

○御年始。三ケ日の新正月が過ぎると、親戚や友人又は懇意にして家に年始廻
りをする。ずつと昔は手ぬぐい二本位であったが、だんだん豪華になり、清酒一
升、塩鮭一本又は町家にはもち米等もつて行くようになった。歓待の仕方も塩引
に豆腐汁、煮べ、納豆、大根おろしぐらいであった。また嫁は晴れて夫同道で婿
は嫁を連れて餅一重ねを持参して実家に泊りに行く。

一月六日

○ユウカイ。この日は田を掘ってドジョウを食べ、又ゲンノウを持って川へ行き、大きな石を叩いて、ハヤ、ニガ等を取って食べ、ひよつとしてよい事があるようにとヒヨウ干しを食べた。

一月七日

○七草たたき。旧七日の朝、昨日準備した七草のうち、芹だけを播粉木すりこぎでまな板の上でたたき、

なんなん七草

唐土の鳥と大和の鳥と

渡らぬうちに

なんなんたたき 七たたき

これを粥に入れて食べた。

一月十日

○初市。この日は町に市が立ち、ウス、キネ、マナイタ、ハシゴ、キャダツ、ツチゴロー。初カメ、初シオその他のいろいろな物が出る。農家は白髭、蕪等は自分で作つた物を神様にお供えした。

○蔵開き。千古万古のみたからが入るようにお神酒、お膳を供えて土蔵の神さまにお願いした。

一月十一日

○稼ぎ初め。この日から藁仕事が始まる。まず当日は荷縄ないである。どこの家でもにぎやかに、朝早くから「結打ちよいぶ」と称して、二人で藁打ちが始まる。荷縄は首の部分に布を巻き、三本をひねり合せるのである。一日の一人前と言うのは藁荷縄五本、みご荷縄は三本であつた。そして元旦に搗いたまるべ餅を手で割つてワタシであぶり、納豆等をつけて食べ、これを力餅と称して一年間の力仕事にたえるという縁起であつた。嫁コは稼ぎ初めまでに戻つた。

一月十五日

○田植。藁と豆がらの田植。今年も豊作万作であるようにと、藁五本、豆がら三本を一株とし、家の東の方に七株を植えた。

一月十三日

○ダンゴさし。小正月十三日はダンゴさしをする。ダンゴはダンゴの木（ミズキ）にさすもので、どこの家でもダンゴの木切りをきそつて、入り山の赤い木を伐り、さしたものである。米の粉をねり、丸め、割れないように塩を少々入れてゆで、それをダンゴの木にさして大黒柱に結えつけ、その上を昆布で巻きつけ、「ヨロコンブ」とした。これにフナセンベイもなかの皮のようなもので作った鯛、カブ、宝舟、その他紙にかいた大判小判、宝みの、打出の小槌等をさげ、また元の方には、マユダマ、十六ダンゴと称して、一段大きい十六のダンゴをふり分けて下げた。マユ玉と十六ダンゴは藁に通したものである。

○若木迎え。どこの家でも「若木迎え」と称して山に行き、主に手頃な檜の木

を一本伐り倒して、尺五く六寸ぐらゐに刻み、五本位を持ち帰り、末木は山の神様に納めてきたものである。その末木が「祝々（いわいわ）」の材料になるのである。又、若木はどこの山を伐つてもおとがめなしであつた。若木で飯を炊く時は、子どもは足をひっこめて坐つたものである。

○祝祝。^{いわいわ}村中、門松や古いお札等を持ち、またダンゴ二枝位を持って、山の神さまの「祝々」に参加する。書き初め（一月二日）等を燃して、炎の上がる如く手が上がるなどと言われている。祝々の火で焼いたダンゴは病除けである。また各家では山の神さまに行く前に、家のうらおもてで「餅の年のゆわゆわ、目々くそ鼻くそとんでげえ、錢と金とんでこい」というて、藁束を焼いたものである。

○嫁、女の正月。正月十五く六日は小正月といい、地獄の釜のふたも開くといわれ、接客に寧日なく働く女衆の唯一のたのしい時である。この時、宝引という賭博の一種で、糸に一文錢を通して引いたものである。糸に錢を結んで、あれば当り、なければ外れ、いくばくかの錢をかけ、夜を徹して行われた。

一月十七日

○女の正月。その日ばかりは一切男が賄いをして女には手伝わせず、一年の労苦をねぎらう家もある。

○道具の年取り。餅を搗き、斧、山刀、唐鋏、鎌、包丁、その他の農具金物を清水で洗い並べて若水をかけ、灯りをつけ、餅を供えて感謝する。年越しである。

一月二十日

○根松を結えつける。楽しい正月もすぎ、いよいよ働かなければならなくなる。この日は年重ね（年祝い）の人が家に居れば、その数だけ根松を柱に結いつける。年かさねとは、男、5、7、15、25、42、61才。女、3、9、13、19、33、61才。

二月一日

○山の神詣り。餅を搗いて山神様にお詣りする。山の神がお田の神に変わり、稲作を守るとの事。この日は山仕事を休み、神を祭る。

○初午。二月の最初の午の日は竹駒さまの祭日なので、赤飯など供えて祀る。なおどういいうわけか茶断ちをする。

二月四日

○節分。煎り豆を一升枡に入れて神棚に供え、お詣りし、その後戸主が豆を座敷、ナカマ（中の間）、納戸、流し、蔵など家中に、

福は内 鬼は外

鬼の目ん玉 ぶつつぶせ

と唱えて豆を撒き、子ども等はそれを拾って食べたものである。

三月三日

○桃の節句。女子のお祭りである。オヒナサマをかざり、赤飯を炊いて、家によつては餅などをお膳にと供えお祝いをする。また、ヨモギの新芽を餅に入れて搗く、草餅を作る。オヒナサマを年一回かざらないと「化ける」などといった。この日、新嫁は新婿と共に節句札に出かける。そして泊らせて休ませる。

三月十八日～二十四日

○彼岸。彼岸の入口の日はダンゴをお供えする。中日はボタ餅をお供えし、お墓詣りなどをして、祖先を祀り、山仕事その他、休みである。中日は山の神様の木を数える日なもので、一切木を伐らなかつた。結願の日は山へ行き、トコロを掘つて茹でてお供えした。お仏さま、トコロの毛で結願のダンゴを背負つて行くといつてゐる。

○春神楽。春うららかなになる頃、佐藤辰神楽一行、村廻り門付けしたあと、神明さまに天下泰平の奉納をし、寄席を打つたものである。宿は本家庄内屋であつ

た。その他観音さまの入仏式の時など招かれて、曲芸、芝居、漫才、バチアゲ、オカメ、ヒョットコなどを奉納する。

五月五日

○タンゴの節句。むかしは旧暦を用いた。男子のお祝い日である。前日、宵節句と称して、よもぎ、菖蒲を軒場にさし、菖蒲湯を立てて、湯に浸した菖蒲で体をこする。健康を念じた。鯉のぼり、内飾りなどは一週間前から準備した。この日、朝は餅、または赤飯、笹巻き、ナタマキ、柏餅などを供えて祝った。

○高い山。いよいよ農繁期に入るので一日または半日休んで山に登る。重箱にいろいろ御馳走を詰め、友人と山の上で諸願をこめて神に祈り、栄養をとりながら、酒盛りをして、明日の農繁にそなえた。

六月一日

○むけの朔日。蛇、蚕、その他のいろいろの動物は脱皮して成長するので、人

もまた脱皮するものだと思われていた。丁度六月一日はその日である。その日のため取っておいたトロロ芋で、トロロをすり、家の東西南北にトロロをかけ、鬼がすべて来られないようにして、そのうち氷を食べ、むけやすいようにしてトロロ飯を食べた。氷屋が売り声高く、「コーリ、コーリ」と売りに来たものだ。

○早苗ぶり。苗の根付きと豊作を祈って、一日を休んで酒盛りが行われた。

○土用入り。菜、大根を蒔き始めた。(秋野菜)

七月

○土用丑の日。うなぎ又はどじょうを食べ、最近は牛肉を、又氷水などを食べ、えい気をやしなう事になっていた。この頃は動物性蛋白質、脂肪が不足がちであった。この日の夜は「丑の日湯」といって、薬草を入れて湯を立てた。又山野よりドクダミ、オトギリ草、ネコアシなどを採り、かげ干しにして必要に備えた。

七月七日

○七夕。榎下部落は上町、下町、新町に分かれ、子どもが主体になり、自身番小屋に祭所を設け、青竹に「天ノ川」「七夕祭」「北斗七星」などと書いた短冊をさげ、寺の太鼓を借りて叩きながら、

ねむたい流す

七夕祭りしょ

とて、村中ねり歩いて、よく朝未明に宮川におしげもなく流してしまったものである。

○盆の七日目。この日は朝早くお墓掃除し、仏壇の前に「盆棚」を作り、前机の上にゴザを敷き、笹竹などを立てて糸を張り、木綿糸にリングを下げ、うみ瓜、枝豆、色々な果物などとソーメンを添えた。そしてソーメンを食べることになった。

七月十日

○観音さまのお祭り。主体は若衆である。朝、今の消防団の幟り旗を立て、大ちょうちんを下げる。鳥居のようなものも準備した。大体は夜祭りであるが、午後から店が並び始める。盆踊り、芝居、神楽なども催された。「パーア」というゴムに竹と鳥の羽根をつけた玩具がなつかしい。

○盆行事。当部落では十三日夕方から迎え火を焚いた。仏がまちがわずに来るようにとのことである。十四日は殆んどの家でお墓詣りである。この日は嫁又は婿に行った兄弟も実家に泊りにきて、一緒に冥福を祈る。兄弟は正月同様、鏡餅一重ねその他を持ってお盆礼にくる。墓前に供えもの、丸め餅、まくわ瓜、枝豆、昆布などを蓮の葉に上げて供える。

八月一日

○八朔のついたち。はっさくといって餅を搗いて一日休みである。その頃から二時間の昼休みは終わり、夜仕事が始まる。また稲番小屋を作り、道路普請など

が行われた。

八月十五日

○豆名月。この夜の月を「豆名月」といって枝豆を月に供え、ゆで豆を食べた。

十月一日

○山神詣り。朝早くオフカシを重箱にもって行き、山の神さまに供え、一はしをあげ、後は家にもって来て、全員で食べる。山仕事は休みである。二月の山神祭りと逆で、田の神がそのつとめを果し、山に帰り山の神に変わるのである。山で三股の木は山の神の休み場だから伐るなという。「トリアシ」だからともいう。
十月十五日

○いも名月。旧十五日、里芋を煮て、まんまるいお月様に三宝に上げて供える。その芋は戸主が別当する。

十一月三日

○大師講。職人に仕事をさづけ保護したというので、この日は職人のお祭りである。大工、左官、屋根ふきなど、仕事を休み酒宴をはって聖徳太子さまを祀る。

十二月九日

○耳あけ。一升枥に煎り豆を入れ、恵比須・大黒さまの神符の前でザクザクとさせながら、

お恵比須さま お大黒さま

今年より来年は

ええ耳きかせてけらっしやい

と、主人がいうと、かげで奥さんが、「はい、はい」と返事したものである。耳よりな話をきかせてくれるよう、甲子大黒さまにお願いしたものである。

○満期の日。十二月の出がわり。つまり下男、下女、奉公していた人が年期明けて実家に帰る日である。給金をもらい、お祝いの餅を御馳走になり、新しい雇

い人と入れ替わる。

○お恵比須講。西宮大神宮様にお頭付きの魚を供え、特に「マツタ大根」を供えてお祭りする。この講は商売繁盛ということから、商いの神さまとして大切にした。そしてその魚は主人が食べた。

○歳取り。門松を山に行つて伐り、三がい、五かいの松をゆずり葉と共に柱に男結びにゆわえる。

○オミダマ。歳徳神さまのお札をアキの方に張り、その下に小さな握り飯を十二ヶ作り、そのオミダマを半紙を敷いたお膳に供え、その上にハシ又は萱棒などをさす。よく年が閏年の時は、十三ヶ供える。

○年越しそば。その晩は、きそばに大体タラ（生）に切りこんぶのおつゆであった。運そばに関しては『佐藤家の昔話』を参考にされたい。

△伊勢講。お伊勢詣りに行つてきた同行者が一年に一回、宿をきめて集まり、一献をかたむけながら当時の思い出を語つた。

△八日講。三山信仰の強い当部落は湯殿山大権現の縁日である八日（毎月）に

各戸主が集つて酒を飲んだり、将来を語り合つた。

△馬頭講。馬車ひき、又馬を使う若衆の馬の安全を祈りながらの慰安の会合で、一年間馬頭觀世音さまをお祭りしながら行われた。

十二月三十一日

○大晦日。年とりの晩は赤牛が錢を背負つてやつてくるから早く寝るなどいい、家にある錢を全部歳徳神に皆供える。年とりの晩のイロリの火は「神さま」の火だから消すなどいう。

なお、正月十三日に「カセドリ」の行事があり、「カッカッカツ」と各家を門付けして歩いた。また「タワラコロバセ」として〈豊作祈願〉行事をしたことも昔はあつたという。

明治のころのはなし

1. 谷風の弟子 出羽崎

向いの佐藤家の祖先に怪力の人がおったという。体格がええくて、相撲が好きで、谷風の弟子になって行つたのがおった。その人が谷風に会つたのは、谷風が上山興業の折に、

「誰でも、谷風のまわしき、たぐついた人は御褒美くれるし、弟子にする」というたんだそうだ。谷風に体当たりかませられっど、みな吹っとんでしまふがつたが、出羽崎という佐藤家の先祖は、仕切りしてアウンの呼吸が合つて、ワツシヨと立つて、ものすごい突張り来たげんども、出羽崎は「どっこい」というど、喰い止めだつて。ほしてマワシむんずりつかんだていうんだな。

「これは見込みのある野郎だ」

ていうたつて。ところが何故体当り受けても吹つとばねがったかていうど、出羽崎は車堰どこの大きいクルミの木さ、三十貫の砂俵ぶら下げて、若衆五人ぐらいさ引張らせて、うなり立てて放したものを、「どっこい」ていうど、三十貫匁の砂俵うけとめ、うけとめしたという話で、毎日その練習したから大丈夫だった。

ある時、ヨウカイ滝といってヨウカイ上人がそこに入つて死んだという滝ある。そこの近所に材木岩になった岩ある。ほの岩、金テコで剥してきて、そして上山の正念寺の土台石にするというわけで背負つてきた。ところが若衆の与一という者がいた。これは少しばかりつうと（ネツチヨパリ）でない。するて言うたことは何たなんとする、三川屋のとこまで行つたら、来たつけ。

「あんつあん、あんつあん、おれ背負つて行んから、あんつあん行つてお飯食まつてけるはあ、遅くなつたから…」

て。したらば、

「待て待て、お前の背中さ上がんねぞ」

「いやいや、上がる」

上がるて言うてから聞くもんでない。ほうして、「ほうか」ていうわけで、背負わせて、うしろから起して呉つど思ったら前さのめた。前から起して呉つど思ったら、うしろさしりもちついた。

「駄目だごで」

「いやあ、何とか」

て、今度、はいつ持つてやつと尻切らせて呉^{たが}だ。ほして家^けに来て、お飯食^まつてもまだ与一は来ね。

「ほんでは行つてみんなねべ」

ていうわけで行つてみたれば、ほんでも三間^いばり（行^いじやぐつてたけど）。

「何だこりや、与一」

て言うたれば、

「はあ、目くらくなつて、見えねぐなつたす」て、「ほうか」ていうわけで、ほこで、石おろさせて、ほっから背負つて、上山の正念寺さ行つて、ドエツと置いだれば、本職の土方八人して、うまくかつがんねがったて。ほのぐらい力持ちだつ

たてだな。

して、ほの出羽崎が谷風の弟子になって巡業して歩った。ところが、こっちに後とりがいねぐなつたもんだから、仙台まで貰い下げに行つたつて。ほんどき谷風梶之助は、「いや、おいしい野郎だ」て言うたつて。そして雷電為右衛門が仙台から出て、谷風のその後の弟子になつたという話だ。

五代前の佐藤孝一宅の久六という人も大力だった。米三俵背負つて、白石の方さ、向うが不作のとき米売りに行つたが、米番の役人が山さ付いていつかつたつて。久六という人は三俵背負つていても、追つかけられねがつたそうだ。十七文の足袋はいて、三尺囲炉裏にアグラかくと、両方五寸ずつ膝が出るもんだつたど。

米一俵を片手で持ち上げるほどだったし、米つめの人足には十人分も仕事したていうことだ。なにしろ、三俵背負つて、一俵ずつ手にもつから、一度に五俵持たれつかつたし、米沢に相撲見に行つて、花相撲に出ようとすると、出ないでくれと言われつかつたそうだ。上山の西光寺の柱を背負つたこともあるし、上山の法円寺まで物供米背負つて行つたという話もあった。

2. 乞食清吾

佐藤家の娘と仲よくなつた斎藤清吾という人があつて、佐藤家では「あだな貧乏な家に娘呉らんね」て言うたもんだから、清吾は娘ば連れて蔵王高湯さ行つて、途中、ドウス平で眉毛このけ剃つて呉で、お齒黒つけて呉て、自分の嫁にしてしまったことがあつたど。娘の親父は半年出入りしながつたげんど、母の方は娘にこつそり会いに行つてゐるうち、いつの間にか親類付合ひするようになったそうだ。

眼鏡橋のところの坂の上に、山形から米商人の手代が来て、清吾の家に来た。

「斎藤利兵衛さんの家でどこだべつす」
て言うたど。ほしたら、

「おら家のどこだ」

「はあ、坂下ってから言わつて来たげんど」

「坂、とことこと下つてきたどら」

丁度そんな時、佐藤家の山から材料伐つて行つて、倉建てて、オニ壁塗つたばり

だったど。まだ目塗りも何もしていねで、壁をふつつけたばかりであった。

「その倉さ、米をみな入れろ」

仕方なく、利兵衛さんだと思つて、手代は米をその倉さ入れたど。

「んでは、利兵衛さんでは、いつも現金でもらつていつから、現金で頂戴したい」
て、宰領が言うたわけだ。

「ああ、現金は旦那と相談して、四、五日うち持つて行くことにしたから、大丈夫だ」

て、ほして、一文も払わねで倉さ米つませて、売りハガキ取ったわけだどはあ。

ほして宰領だは帰つて行つて、「どうだった」て、旦那に聞がつたわけだ。「斎藤利兵衛さ置いてきた」「どこだった」「あの坂、ちよつと下つたどこだ」「何だ、あそこは乞食清吾で、あの清吾さ置いてきたか、ほんでは銭など取られるもんでない」ていうわけで、旦那は寝込んでしまったど。

清吾は、売りハガキ持つて、すぐに関の糶屋に行つたど。したら、

「何んだ。こだえ早く、斎藤さん、どさ行くどこだ」

「いや、伊達さ米売り行んかと思つて…」

「伊達さ行かねったて、おら家でも糶屋してる。おら家でも米、なんぼでも要つから、おら家さ売つたらどうだ。どれ、売りハガキ見せてみる」

て言うたらば、

「米、三百俵、いや、この米どこにあんなだ」

「うちの倉よ」

「何だ斎藤さん、正直言うど、お前ば乞食清吾だの、貧乏清吾だのて言うていつから、お前、倉持^いつてたなんて…」

「いや、倉、行^いじやつて見てけろ」

「はあ、人は見かけによらねもんだ。ほんでは…」

ていうもんで、ほこで売りハガキ渡して、現金のもうけ、一日稼いで十文や五文の時代、何両ともうけたずもの。ほこで、ほしてはいつ持つてきて、家さ休みもしねで、すぐ山形さ銭払いに行つたつて。ほして、

「旦那、実はこういうわけで、あれしたげんど、おかげさまでもうけらせてもらつ

た」て、米代金さノシつけて持って行ったもんだど。ほしたれば、ほれ、錢受けとった他に普通より高く錢入ったべし、喜んでこんど、

「斎藤利兵衛なて、細かいことばり言うて、あの野郎、うまくないから、お前さばり米とどける」

という話ではあ、ほれから道ついて、何んぼでも米よこすがったずも。

はいつ、関の糶屋はあの辺ですばらしく米さえもって行けば、もうけ分かっていっかつたつて。そして産物商やつて大きくなる。日清、日露で戦争ではキンシ勲章もらう、先^{せん}にの金で四五〇円もらうがったそうだから、盆前稼いで若衆は四、五〇円ていうときだから、尻ついてお茶飲みしてで、七人前あつたし、田地からも米五、六〇〇俵入ったというし、榎下督頭にもなったほどだったど。

採訪ノート ― あとがきに代えて ―

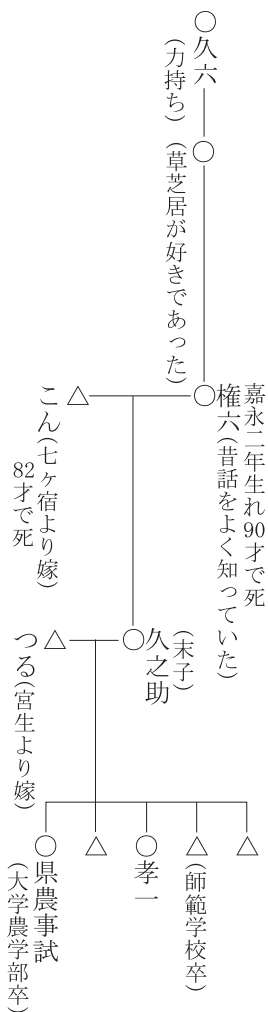
七月六日に佐藤孝一氏宅で昔話を聞いた。年中行事をメモして下さった中にあった二、三の疑問を持つて、四方山話を聞くつもりだったが、「通過儀礼」についての準備をして待っていてくれた。聞いているうちに「昔話、伝説」が二十話ほどになったので、それを集録し、合わせて、『桐栽培の研究』という、佐藤氏が請われて本庄村の森林組合長をつとめていた折に執筆出版したという本がまた佐藤氏の「語り」の特色を伝えていることもあり、再録の許可をもらったので収録することにした。氏が四十五才のときのものである。さらに「年中行事」と、佐藤家と関係のある逸話を二話、テープからとったものをおさめて一冊とした。昔話の研究がその社会で昔話のしめる立場をも考えて行く必要のあることを、関敬吾博士、野村純一先生、瀬川拓男さん、大島広志さんとの話合いで教示していただいたこともあって、その資料の一つになればと思ったためである。

昔話について言えば、「十二支ばなし」に含まれると考えられる「燕」の話はツ

バメを棺につける風習、炉橡をつくるときは「四方ツバメ」にしてはいけないという伝承、そして炉橡の北の方の一ヶ所をツバメ合わせにしないことになっているという事をお聞きしたことは貴重なことと思っている。

その他、村のこと、家柄のこと、その他メモ的にお聞きしたことを書いておきたいと思う。

○佐藤孝一氏が昔話をきいたのは祖父権六氏からで、七〇%ぐらいであろうという。他は、「とりおやじ」といわれた下部落（姥懷）の人や、世間話風に他人から聞いたものという。佐藤家の系図は次の通りである。



○孝一氏の頃は学校に行くとロクな者にならぬと言われて、百姓の家を継いだ。昔話を聞いたのは小学校に入る前五、六才あたりが頂点で、小学校五、六年頃までの時期であるという。権六氏の父は芝居好きで、一座を組んでしばしば村の外にも出かけた。アカノオドシのカブトが残っている。芝居に使ったものらしい。

○イロリ端で祖父は火箸を持ち、それを小道具にして語ったものであったから火箸がセンスの代りになったりした。「ヨコ座にすわる者、ネコ、バカ、ボーズ」とか「他家のヨコザに坐るな、米味噌を続けんなね人が坐る」などといった。

○若衆は人足として問屋に常駐していなければならなかったから、比較的暇なときもあつたし、宿場として馬が二十五頭置かれていたといい、人足も二十五名から五十名ぐらいいは問屋にいて、いつ荷背負いに出なければならぬかわからなかったという。小咄などが流行したのはそういった理由もあり、中には小咄が上手で、「寄席ぶち」といって話語りをしたこともあり、江戸でそれをやったという話もあつた。

○佐藤家は「語ろう」の家であつたらしく、「佐藤語ろう」などという言い方も

あつた。また斎藤家も「語ろう」の家であつたらしく、佐藤家から斎藤家へ嫁に行つたので「語ろう」の縁組などという言葉もあつた。斎藤運太郎家を「ズボの家（嘘語りの家）」などとも言つていたので、斎藤家ではその呼び名を非常に迷惑に思つていたようであるが、今もそう呼ぶことがあるということである。

○「吹く蔵」と言われていたのは、斎藤弥太郎家である。「ホラの吹く蔵」という称号だったが、これも迷惑しているという。

○明治に入る前は檣下部落は非常に裕福であつたが、明治以後、参勤交代がなくなつて、急に没落した家が多い。従つて、ナリフリかまわず働かないと暮らせなくなり、部落の休日も少なくなつて、他村に比べると、檣下ぐらい休日の少ない部落は見当たらないという。それでも、今まで安泰に暮らしていた人たちは、急に働いてもうまくは行かず、気がついてみたら所有田が七割まで他村に移つてしまつていた一時期があつたという。それから田を買い集めるために働いて、現在まで来たという。

○江戸時代の問屋の名称は今も屋号として残っている。エビス屋、宮地屋、大

和屋、秋田屋、三河屋、庄内屋、山田屋、滝沢屋などがあつた他に、水車で米搗きをやつていた家は車屋といつていた。部落には『親不孝日記』という書がのこされていたというが、今は誰が所有しているかわからない。宿場町であつたために、農村にくらべて、都会的な一面をもつていたであらうことはこの日記の中に登場する話などにも読みとれるといわれるが、未見である。

○隣部落の姥懷の「とりおやじ」というのは、佐藤伝^{つた}右衛門という人で、明治から昭和の初期まで生きた、なかなかの学者であつたらしい。孝一氏は小学校の頃に話を聞きに行ったことがあるという。現在の当家は佐藤務氏が御主人という。

○祭文が祭りによく来たが、祭文語りは宝引き仲間に仲がよかつたようである。また馬喰もよく来たが、バクチが好きであつた。馬喰が馬を率いてくるときには一八綱といつて六匹、二八綱といつて十二匹をつないできた。

○檣下と下の部落の皆沢は仲がわるいのか親戚がない。また檣下の宿場町が整備されたのは元禄年間らしく、それ以前は向い町に家があり、参勤交代の制度化された寛永十二年（一六三五）以降に現在の場所に移つたものと考えられ、最も

古い墓石の銘が元禄五年のものという。以上の墓は向い町にあるという。

○糸とり娘として最上（山形地方）や七ヶ宿から娘が働きにやってきたものだが、それらの娘は特別の部屋に寝かせた。大抵はその前の部屋に男が番をするという事で寝せていたが、夜這いなどもあったという。ただし、部落の娘に夜這いをするとは固く禁じられていたという。

○お女伏岩という岩が部落の下手にあり、男女の夫婦の契りを初めて行う場所とされていた。家の中で初契りをするとは弁天さまが、ヤキモチをやくと言っている。現在は「オメフシ岩」が訛って「梅干岩」と言っている。

○発句の会などがあつて、それを額にして寺に納めたものであつた。

おとぎり草

佐藤家の昔話（九）

昭和五十年七月二十五日 発行

話者 佐藤孝一

編者 武田正

南陽市三間通二三二の三

東北文教大学短期大学部民話研究センター資料叢書

おとぎり草 佐藤家の昔話(九)

*本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

平成二十三年七月三十日

東北文教大学短期大学部民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

東北文教大学・同短期大学部附属図書館内

(電話)〇二三―六八八―七五四四

- 『西川町の昔話』(一九七五年九月発行、二〇〇六年三月再刊)
『むかしあったけど』(一九七五年二月発行、二〇〇六年三月再刊)
『米沢市築沢の昔話』(一九七二年十一月発行、二〇〇六年三月再刊)
『米沢市塩井の昔話』(一九七三年十一月発行、二〇〇六年三月再刊)
『安楽城の伝承(一)』(一九八四年四月発行、二〇〇六年三月再刊)
『安楽城の伝承(二)』(一九八五年四月発行、二〇〇六年六月再刊)
『安楽城の伝承(三)』(一九八五年十月発行、二〇〇六年六月再刊)
『高畠町和田の昔話』(一九七九年八月発行、二〇〇六年七月再刊)
『及位の昔話(一)』(一九八〇年八月発行、二〇〇六年七月再刊)
『及位の昔話(四)』(一九八〇年十二月発行、二〇〇六年十月再刊)
『及位の昔話(五)』(一九八一年二月発行、二〇〇六年十月再刊)
『佐兵ばなし』(一九七一年一月発行、二〇〇七年四月再刊)
『まま子いじめ 米沢市六郷・宮井の昔話(一)』(一九七四年四月発行、二〇〇七年四月再刊)
『かっぱの硯 長井市・米沢市六郷の昔話』(一九七四年七月発行、二〇〇七年四月再刊)
『行けざんざん 小国町昔話集』(一九七六年九月発行、二〇〇七年四月再刊)
『お婆の手ん箱(一) 阿部キヌオさんの語り』(一九七七年四月発行、二〇〇七年七月再刊)
『及位の昔話(二)』(一九八〇年九月発行、二〇〇七年七月再刊)
『及位の昔話(三)』(一九八〇年十月発行、二〇〇七年七月再刊)

- 『牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第一集』(一九六八年三月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『続牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第二集』(一九六八年十月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『続々牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第三集』(一九六九年一月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『牛方と山姥(四) 海老名ちやう昔話 第四集』(一九六九年四月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『飯豊町昔話集 ― 大平・新沼・高畑 ―』(一九七一年九月発行、二〇〇八年四月再刊)
- 『蛇むこむかし しらたかの民話』(一九六六年二月発行、二〇〇八年四月再刊)
- 『お杉お玉 小国町昔話集(一)』(一九七〇年二月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『さとりのお化け 小国町昔話集(二)』(一九七〇年八月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『鬼と豆のくいくら 小国町昔話集(三)』(一九七〇年十月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『田の中の田三郎 近きよ姫昔話』(一九六九年八月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『お糸唐糸 故安部忠内翁／安部はつよ姫 米沢の昔話集』
(一九六九年九月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『つゆふじの伝説 安部忠内・稿』(一九六九年十一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『さるむこ 田沢の伝説と昔話』(一九七六年一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『ちようじやのむこ』(一九七六年一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『飯豊山麓 中津川昔話集(上)』(一九七〇年十二月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『飯豊山麓 中津川昔話集(下)』(一九七一年一月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『木小屋の生活 民話序説』(一九七二年四月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『カマイタチ 東根昔話集2・置賜昔話補遺』(一九七二年五月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『川崎みさをさんの昔話』(一九七九年一月発行、二〇〇九年七月再刊)

『なら梨とり 赤湯の昔話』(一九六七年一月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『置賜平野の昔話(一) 民話のこころ(対談) 浜田広介先生と海老名ちやうさん』

(一九七一年四月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『置賜平野の昔話(二) 海老名ちやう昔話補遺』

(一九七一年八月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『たかみねと秋田の昔話』(一九七八年二月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『佐藤家の昔話(一) 山形県上山市檜下』(一九七二年七月発行、二〇一〇年七月再刊)

『鳥吞爺 佐藤家の昔話(二)』(一九七二年九月発行、二〇一〇年七月再刊)

『鉢かつぎ姫 佐藤家の昔話(三)』(一九七二年十二月発行、二〇一〇年七月再刊)

『天とひばり 佐藤家の昔話(四)』(一九七三年三月発行、二〇一〇年十二月再刊)

『へらへら話 佐藤家の昔話(五)』(一九七三年七月発行、二〇一〇年十二月再刊)

『夢のほたる 佐藤家の昔話(六)』(一九七三年十一月発行、二〇一〇年十二月再刊)

『ぬるくす男 佐藤家の昔話(七)』(一九七四年十月発行、二〇一〇年十二月再刊)

『蛤姫(上)(下) 佐藤家の昔話(八)』(一九七五年四月発行、二〇一一年七月再刊)

『おとぎり草 佐藤家の昔話(九)』(一九七五年七月発行、二〇一一年七月再刊)

『ゆき女 佐藤家の昔話(十)』(一九七六年二月発行、二〇一一年七月再刊)